



心學道孔話

七篇下

廿一

9
3895
21



門 〇 〇
號 3895
卷 21

心學道

親父之汗

之詰七編卷之下

志だくよあつて金銭財貨漏て盡てや

つて書物を讀せて博學小しておいても

色くそ飛をいへんでおいてもだつと一ツの心だけ

がよふ心と何もあるぬまよりあつかりとおし法

をて嚴發行を他法を仕せどよぞ心學でもさせ

て本心といふものを知らせておけば大丈まいあるふの悪

いなき親の位業娘を拵てりよ行ける時分よ成て外

縁談のりやよてあるとおやう第一又まゝは男の年と

いらつ位といひまはし人まご四十位で心産うまはと

早稲田 大學 圖書館
昭和 27.6.16 受
藏 書

川

心學道活

七編

たまはせんたるの事でもお前の玉をなめるで糞や芥
 をつたふ後ご親じや。何れもあらぬ平生後とんで
 並りのうちがうつてゐる世に人の子を可也がは
 との六みんあぶくがものや。丁度猫が子をむと
 いがうてあめたりかたあたりたり志であげくの果
 みは客よこ志のふやうふそのつたへ端らして
 いつたり疾く又やうてい家房へておとてふ仕合
 ぶりのしと思ふてあるはあんのるやい猫の
 の志かりとりすの。皆親の仕とんとるが毎夜
 此世しやと大根やの息子は喰を教へて逐るは

固くやうふもので喰とりの種をまくと喰らてる
 皆親の志とんごもの

撲ぬぬよふて教へかたは子や妻とらむお親が
 ぞよぞよせよるが可也なば心学をよせて中心教
 初らせて志とんごもの心学をかりたやあ。二教の
 極とらけ本心を教るたうり石田先生がけ心学
 と此界をふされてごんふ文育ありのでも志をよ
 さんまれば。初まるやうふしてありまはごよを清子
 さぬを此持あされの方へ此後此の世をせあされやせ。
 志うけとんごものを子供に教へるものぐはやあま

る。あれ此のうらみさう酒のんぶら甘御堂さう
 まはら皆親の仕らんどのどや。あれのまられどや
 あいとおりふと子守るちのい親法杖は酒のまら
 ちゆつても酒とりよまのい懸いのどや。さよそ
 あまのいませともあふとおぼくめはの初まてある

横さぬよ親はまゝともしさあおらに

解虫の子じやとはつこれそのれ

交が親の情を慕して親を換よまらつたりぬて
 仕舞が孝行。人々孝行さくあまは外の女。はあ
 消へて仕舞ます。孝の美その長で引ひのりこの

孝行の種を蒔てととぞんあもつかうあまのが
 ちゅうもあまぬ。これよ懸て吐くが酒をうま
 丁度今月の十五日が永代橋の落成て人のいんふ記
 まゝと三十三孝忌とやと懸てまはらうまゝと
 がとん孝子の吐く由はまらんで中とませらおんを文
 化二年丑のころ。永代橋の落成と二年あまのいん
 小舟町辺の豆腐屋をよ親父がばらうまゝと甘房さよ
 又死んで孫よめと武人の娘が男親のまてまらうと
 け時節と廿四歳妹と十六七はぬまゝとまらうまの親
 父が内障でかいられ眼がらんあくあうまゝとあ人の

見てぞややうお前まへの業わざあいのころ心こころやうすけしよと業わざ
 がうづらわて下くだされては仕つかりもあつてまごやうと後あと
 業わざして下くださると尋たずねたらまゝたうよふ尋たずね
 てくれとそまゝは世よもまを痛いためるごめつて思
 業わざあるまふとおのふらうとあんごぞそ優やさしいころ
 ざうらぬも却かへて業わざとさふやうふりのたあして
 せせなが外ほかのゆでもあはれる池いけのまこれ医い者しや夜の
 うと一ひとやうのめりくうてとやうごよも知しつてのむ
 せし金の老おい免めん出で来きやうとづもあゝ去さるがうとま
 ちありやああるとらふらめりごふらうとて工く面めんも出で来き

やううと忍しのぶ目めが眼まなこもて色いろも悪わるく物ものもよみど
 ろふとつよを妹あなぢつと字あざて好たく考かんへてや姉あねさんい
 りおのい出でしまゝとふ教おしえおれあまごも身みを若わか
 果ぐはまづ先まうとごようおあぐらひあありとよおまの
 を金かねでとと人の眼まなこがよくありまおされとあう私わたし
 づいでもよふととらまはらうとごめぢうとて下くだ
 さいまおとらふを。姉あねがよめておまうとまきして思おもひ
 ぢや申まをそよはのけらぬでもあふとらうらゆふ年としも林はやし
 ばふありや勅つひのらるもあふらゆふ金かねもああるまゝい
 又またそあゝハ年としもゆのぬらう跡あとよ好たてとて人の心こころから

出あて命令をあらうし、まゝこと肉にかへて我に換へ素
 より吉原の妹も何の面目あるていつまもふけ言ぢや
 死ぬよりの死は仕方ないとおもひこんど居て念ふふと
 しくとたゞはうらりも夕方にもありまゝとて死
 ぬるまゝと永代格とえ格を極めて永代格へおし
 とも初夜五人通りも稀はぬて殊は青冪おしと
 探子よまををて既よかよと居てまゝとておひ
 まゝせば我あき跡目のふ自中ふて人のさうさん殊は妹
 とおひ誰を便とよぬとよふもあひ命令とさうく
 おしとあひが死んど先で眞寔のめさんは何と言分

仕やうまゝとけ世よと居てさんもさうの仕やうと
 勤めして居る妹もふがいあひ姉とあひそばか
 ら木もそれもあせの約束と探子よまおつて思ひ泣
 思ひ泣して建もまては居ておぬ身とおひひまひ
 身つららふさる向ふあう。おら約打し書を思つてお
 そものありんからまてい詮か〜と既よかうよと居て
 たはさうさん。今の男が居るおつてよと志つてのたさぬめ
 是まの〜といふと或お怒の商人の子息で深川へ通ふ
 及まがら遠目よ女の探子よりされて居るをみるから
 是ハ太の〜をさうとらひおやうなるので書を授けよと

のふあつらうであらうふうら先取て松子をまててんふ
 こ。あつらふめてこのでいざうまら。そふとふとをまが
 ぶふぞをまてて殺してつらまて。こやけのを捕りて
 ちのかりとおさしてふまびんあふ。かでもあふいよ
 是の若げのふらうう。ちのふとおひあがう。そあふ
 何で死あふとまはたう。こづいあも有あふ。校の心の心
 ろう死あふとまてあふ。つめこのものであらう。ふ縁も後合
 さあつまづ一通う。いよてんやとられて。心の一。そふふ
 涙をあふて。心辱ひは。ちうまらう。心と隠さす。心世
 中まらう。いよて。親の眼病う。妹の身の代を。あつらう。

るとをまて。まて。言まの。ち。つ。心で。あふ。松子。ふ
 け。男も。二人の。女。れ。孝。行。を。感。心。して。まて。あ。つ。ら。う。た。が。何。と
 お。り。あ。つ。ら。う。情。の。う。ま。五。友。出。して。い。よ。ふ。あ。ま。あ。う。死。ぬ。あ。ら
 及。び。ぬ。是。さ。あ。ま。い。言。う。が。海。の。ち。う。も。あ。つ。ら。う。て。い。よ
 業。を。の。ま。せ。あ。つ。ら。う。ふ。さ。う。ま。あ。つ。ら。う。れ。て。か。も。死。ら
 ち。う。ふ。娘。一。く。あ。つ。ら。う。心。を。う。ま。ら。う。く。命。ハ。惜。く。い
 心。ざ。り。ま。せ。ん。が。け。五。友。の。ま。ま。が。あ。ま。い。二。人。の。命。は。あ。つ。ら
 清。恩。何。心。の。教。誰。う。知。ま。ぬ。心。方。あ。つ。ら。う。載。く。か。ハ。あ。つ。ら
 ません。う。あ。つ。ら。う。て。あ。つ。ら。う。時。あ。ま。い。心。解。退。つ。こ。ま。ら
 いた。う。ま。ら。う。が。せ。え。て。後。日。は。心。れ。は。あ。つ。ら。う。も。上。り。こ。ま

ぞんぞまのぞを名所をぬりまして遊ば
あたます男イヤくおまの親隠して遊ば
れあつて迷惑する名所を字と由へ又あつた
尋ひてあるもあらふ縁があらば又逢ませよ
ちつとも子くゆらう志やと咄親法が業とて
そんなるゆりまると音捨てえあつた
改てたまはらう釣灯の親れつるまでおむ
あつたが親も父るる宿一ゆりて迷くぬ
を世せば親父も獲をほづしてそれにあふ
まの心方へ何郎の人であつたふ感心あ人も

ぞんぞ縁があつて此れおつた心もの世
そ親の休んでぬる親の藤治よからうと
この業の験のあつたこの縁程つて親父
もあつて平生通りよありまうとま後
もあつた若い男はえあつて居るこの
一夜のあつて礼を言ふものと毎日
あつたで娘も親妹の人よ心を付て
かとお善き事を付て居まうとま
あつた下度三年のつるまうと文化四年
十五日八幡の糸礼でいざりまうと

往來多由へありあらし人の悪るゆもあらしかかと性
 来目をもけて居りまはし草物を着て鹿をかかけ
 て肩より最良の風呂敷色をかきてさうしと通は
 人があはをもちろりこつるこそま人の遠いあらし
 悪くもさうしで欠出として意外あらしと申すゆ
 るゆがゆざりまはすかまら二三年あは永代橋のうで
 何月いつにわおはまあらし裁こそのがゆざりまは
 ぬもそのゆざりではござりませんり男あらしのあ
 ろんあらしがありまら親父どのの眼はさふでゆざ
 りまらたらとあらしらんあらしまは遠いあらしと

あらしまらあらしとぞまき後ゆ出あされてゆざりま
 人やちと急ぐゆざりあらし又あらしまら目らあ
 免れあされてゆざりませんや又とやてもゆ出あ
 さまあらしあらしゆざりませんと無理お
 神を引て難きぬやゆざりあらし後あらし遠入を
 親父さぬく年以ゆざりゆざりあらしゆ出あされま
 ちとゆざりあらし親父も死で出てヤとゆざりあ
 付てゆ連ゆと叔後く始がゆざりゆざり全く始
 の命の親私の眼病平愈もまゆざりゆざりゆざり
 せめて一言はゆざりゆざりゆざりゆざりゆざりゆざり

逐て抄のうら火りでもをかとおりかて出て見ると何
 かうもち巻で膚脱てかけてある人何れでいふ
 ますとまはと今永代格が成て懸し人死しやと
 いふてもあてゆく強で考へて見ると平田力があつた
 まゝをまひむふゆくと丁度永代格かゝる時
 ちりまひるるるる報悪者悪報でいなります
 があつてまゝまひるるるる時節あつたのでいふ
 まひるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 らら己が命も助るころふものぐたふまゝにたす
 らるる永代格助つても永代格天網恢々疎而不漏で

天道極の何となく目が着いやうでもさうさうさうさう
 怒ろしいものでござりまゝにまゝにまゝにまゝに
 そのるるるを吐し—まゝにたゝまゝにまゝに
 して見まゝにその肉れ二人もさうの命れ親又その
 ろろの入伐つともまゝにまゝにまゝにまゝに
 以来親親同根まゝにまゝにまゝにまゝに
 若系の子も信出して永く世話をやまゝにたう
 今でいふまゝに—とありまゝにまゝにまゝにまゝに
 も悪も必を報ひまゝにまゝにまゝにまゝに
 らのむつてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

徳のゆるよあるもたつて心のいつかへ向ふところある福
 福の禍後でいふ己が身あつてと禍後がまの福後と
 つゆりの天道極よこのあらず依怙具員とつゆ業が
 ふんそれを乾坤必無私とやますす先かつよはなりの
 ますすのう今日いふまゝいふまゝ

心學通言 禮 世編 一五
 徳のゆるよあるもたつて心のいつかへ向ふところある福
 福の禍後でいふ己が身あつてと禍後がまの福後と
 つゆりの天道極よこのあらず依怙具員とつゆ業が
 ふんそれを乾坤必無私とやますす先かつよはなりの
 ますすのう今日いふまゝいふまゝ

